

大隈講堂(保存・再生)

設計：佐藤総合計画



上—外壁面タイル詳細
下—北側の大隈庭園から見る



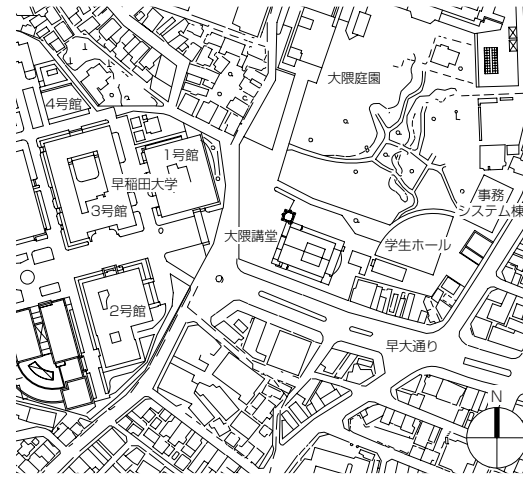


左—正面全景、右—同夜景

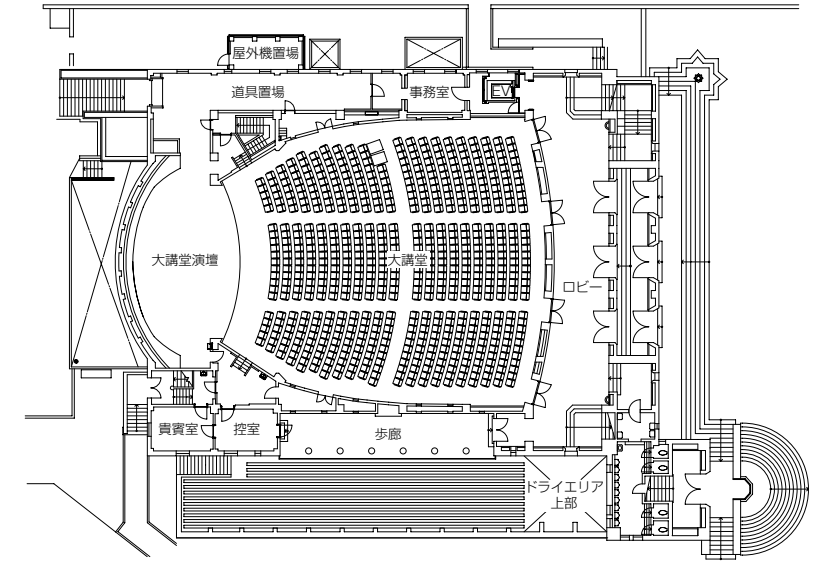
■建築概要

名称：大隈講堂（保存・再生）
所在地：東京都新宿区戸塚町1-104、早稲田鶴巻町538
総合監理：早稲田大学 キャンパス企画部 企画・建設課
協力：中川武
設計監理：佐藤総合計画
施工：戸田・熊谷建設共同企業体
敷地面積：21,544.61㎡
建築面積：1,225.95㎡
延床面積：3,709.65㎡
規模：地下1階、地上3階、塔屋1階
構造：SRC造、RC造
工期：2006.6～2007.9

●INAX使用商品●FT-2OM1283（スクラッチ面）



配置図 縮尺1/5,000



1階平面図 縮尺1/600

Design + Technique

Renewal · Refresh · Reduce

幸せな建築

関野宏行

HIROYUKI SEKINO

□大隈講堂改修における “生き続けるための保存”

建築は生きている。それは使われなくなった建築が朽ちる姿を見れば分かる。「早稲田大学大隈記念講堂」は長生きをしている。そして更に不老不死が望まれる恵まれた建築なのである。ミノル・ヤマサキは「50年後には誰もその建築を設計した建築家を知らないだろう。しかし建築がそこに存在し続ける。それが最も重要なことである」と述べている。しかし、彼の設計した「ワールド・トレード・センター」は不幸な最後を遂げた。不幸な最後でなくとも50年を超えて愛され、生き続ける建築は少ない。

「大隈講堂」は、昭和2年（1927）の竣工以来、2007年で80年の歳月を経ている。「故大隈総長記念事業」として佐藤功一、佐藤武夫の設計で建築され、早稲田大学のシンボルとなっている。その特徴的な時計塔の高さは、大隈重信の「人生125歳説」に基づく125尺とされている。早稲田大学は、それを記念する創

立125周年を2007年に迎えた。新しい第二の建学に向けて、先進的教育と歴史や伝統を両立すべく、“変わりゆく早稲田”と“変わらない早稲田”を意識している。「大隈講堂」の多機能型文化ホールへの保存・再生は、この記念事業の一つであり、その価値観と連動して、伝統を伝える変わらない歴史を保存・復原した。更に変わりゆく今の時代にふさわしい機能を備えることで、建築に再び生き生きとした生命を宿す“生き続けるための保存”を目指した。

□感性と感触の復原と保存

昭和8年に谷崎潤一郎は著書『陰翳礼賛』の中で、当時入り始めた西洋的な価値観のつるつるピカピカしたものに対して、仕方がないと思いながら「われわれは人間の垢や油煙や風雨のよごれが附いたもの、乃至はそれを思い出させるような色あいや光沢を愛し、そういう建物や器物の中に住んでいると、奇妙に心が和らいで来、神経が安まる」と著している。これはその時代の気分や感性を代弁していたであろう。

「大隈講堂」はゴシックなど様式を取り入れながらも、各所に時代の感性を継承した進取のデザインが施されている。その空間には、現代的な明るく爽快な空気感ではなく、薄暗く湿潤で重たい空気感が漂い、時代性を反映した手作りの感触のあるディテールが、体験する者に歴史を感じさせる。そのデザインの感性や

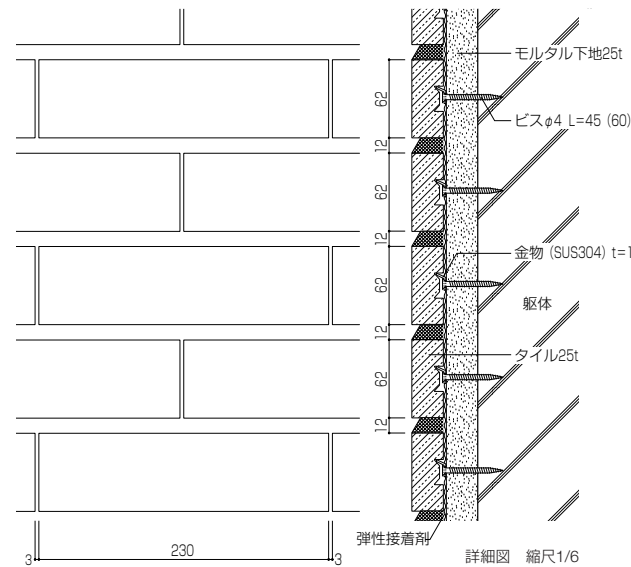
建築の感触にこそ、継承すべき重要な建築の価値がある。保存・再生に際して、必要な改修を行いながら、建築家のデザイン意図や感性を継承した復原を行い、更に歴史や記憶として建築に宿っている各部の感触をいかに保存するかを、入念に考察して設計を行った。

□感触を継承した外壁タイルの復原

設計に当たり建築を調査すると、外装はその多くがオリジナルの状態が残っていた。しかし外壁タイルは剥離と落下の危険性が高く、ほとんどを撤去し復原する必要があった。

復原に際し、できるだけ忠実に過去の材料、製法をもとにした。同じ採取場の土の成分が時代を経て異なるため、ベースとなる木節粘土、斑として発色する蛙目粘土と鬼板（天然の酸化鉄）の色彩と分量の調整を繰り返し、形や色彩を忠実に復原した。しかし、過去の技術的未熟さに起因する高い吸水率や、裏足のない形状など、劣った性能は改めざるを得ない一方で、未熟さ故の色調、寸法などのばらつきが醸し出す“手作りの感触”がどうしても弱まってしまふ。この重要な記憶を継承するため、製造工程を詳細に検証して、土の調査で細やかに色調のばらつきを再現し、タイルの成型後、スクラッチを手で付け、切断加工を行い、焼成に移動する工程を人の手で行うことで無作為な変形を付加した。

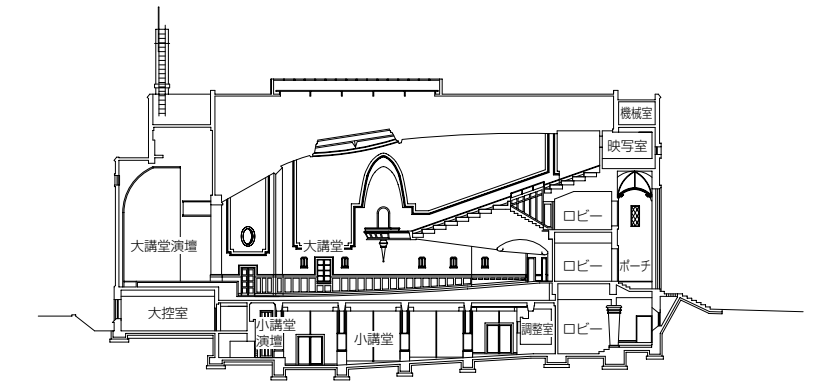
また、既存のタイルは横目地を基本と



詳細図 縮尺1/6

して、縦は突き付けで伸縮目地はない。これを復原するに当たり、通常の張り方では割れや欠けが起こるため、意匠と品質確保の両立を図ることを検討し、脱落防止ステンレス金物を併用した“接着張り工法”を採用した。横目地はモルタルでタイル下端部分をへこませ、その下のタイルの上端部分をタイル面まで斜めに出す形状の“しのぎ目地”としている。*

せきの・ひろゆき—佐藤総合計画 設計部長／1958年生まれ。1980年、早稲田大学理工学部建築学科卒業後、渡邊建築事務所入社。1982年、佐藤総合計画入社。
主な作品：東京国際展示場（1995）、すみだスポーツ健康センター（2000）、広州国際会議展覧中心（2002）、小松日の出合同庁舎（2002）、東北産学官連携研究棟「とうほくOSL」（2003）、簡易裁判所墨田分行舎（2007）など。



南北断面図 縮尺1/600

上—大講堂（写真提供：早稲田大学）
下—地下1階小講堂ロビー